うらがた　ひろし

# 艶陽天 VII

青年出版社

# 艶陽天（うらら かな ひ）

## Ⅶ

浩然著・伊藤克訳

青年出版社

## 訳者紹介

伊藤克（いとう かつ）

1915年東京に生まれる。1934年淑徳高等女学校卒。1936年より1961年まで中国に在住。1955年中国作家協会瀋陽分会会員。1956年より北京人民文学出版社特約翻訳家となる。現在中国文学翻訳家として活躍。
主要訳書――鮑秀蘭というペンネームで日本語訳，陳登科『活人塘』，白朗『幸福なる明日のために』。蕭蕭のペンネームで中国語訳，『樋口一葉小説選集』，島崎藤村『夜明け前』，『徳永直選集』，『宮本百合子短篇小説集』，野間宏『真空地帯』等，帰国後，伊藤克として，呉源植『金色の山々』，胡万春『光は大地を照らす』，馬憶湘『赤軍の娘上・下』，金敬邁『欧陽海の歌上・下』，工農兵故事会編『ものがたり紅灯記』，中国青年出版社編『中国青年英雄伝Ⅰ』，高玉宝『高玉宝』，鄭加真『北大荒賛歌上』，浩然『艶陽天Ⅰ～Ⅵ』。

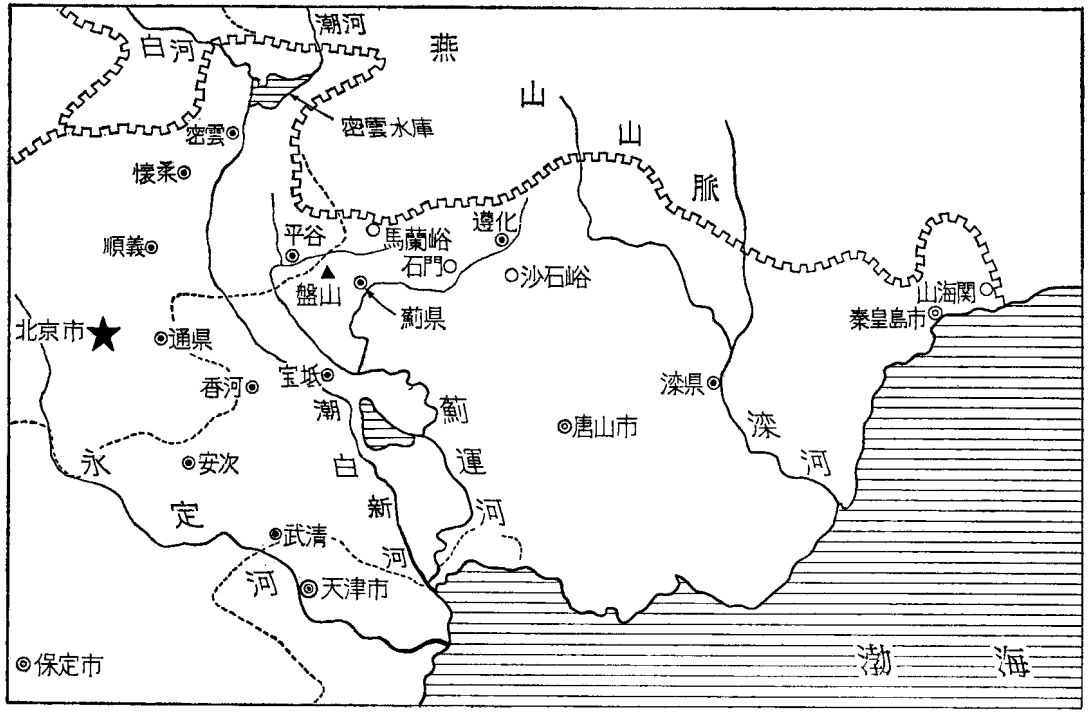
艶陽天（うららかなひ） Ⅶ　　定価 980円

1974年5月31日　第1刷発行

著者　浩然
訳者　伊藤克
発行者　福井馨

発行所　東京都千代田区神田錦町1～4　株式会社　青年出版社
電話（291）1189　振替 東京 49658

0097-071046-3835




中国国際書店発行「中華人民共和国地図」より作製

# 第百八章

韓道満と馬翠清のふたりが、韓家の門口についたとき、またもや、どしゃ降りになって来た。ふたりは屋根つきの門の下に立って、濡れた足をばたばたさせながら、互いに顔を見合ってにっこりとした。この大雨をまぬがれてよかったね、という意味だった。

韓道満がいった。

「はいんなよ！」

馬翠清がこたえた。

「あんた先にはいって、わたしあとからついてくから」

韓道満がいった。

「中にはいったら、おまえが先に口をきくんだぜ」

馬翠清がこたえた。

「わたしは唖のふりしてるわよ。おしゃべりすると、つい口をすべらしちゃうからね」

韓道満がいった。

「唖のふりするんだったら、なんでおれと一緒に来たんだい？」

馬翠清がこたえた。

「あんたを勇気づけるためよ！　もし、おじさんがあんたをなぐるようだったら、そばであんたの加勢しようと思ってね」

ふたりはまた笑いあい、小声でなにやらぼそぼそと相談しあった。馬翠清はあの日、孫桂英を説得して、労働に参加させたことを例にとって、韓道満を勇気づけ、やっとのことで中へはいっていった。

部屋にはいっていくと、とたんに熱気がふたりの身体をつつんだ。見ると、焦振茂と韓百安が、小さなあかりの下に坐っている。もう長いあいだ話しあっていたらしく、そのようすでは意気投合したようで、顔をくっつけるようにして、坐っているばかりでなく、ふたりとも、とても機嫌がよさそうだった。部屋の空気までもが、いつもと違っているみたいだった。

ふたりがはいって来たのを見て、焦振茂は笑って韓百



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

安をつっついた。
「見ろ、来ただろうが？　おめえは頑固に、来るはずねえとがんばってたが、当世の若者は、おれたち年寄りより、ずっとふとっ腹なのよ！」
韓百安は具合悪そうに、オンドルの上で尻を動かして場所をあけると、北側の壁に視線をあてたまま、
「まあ、坐れや」
といった。
韓道満はさっとわきによけると、オンドルに坐るように、馬翠清にすすめた。
馬翠清がいった。
「わたしはいいわよ、こんなに濡れてるんですもの、あがらないわ」
そういいながら、焦振茂によりそうようにして、オンドルのはしに腰をおろした。その足もとに見るみる、濡れた靴の跡がふたつ、しるされていった。
どうしたことか、韓百安はとも角として、あとの三人は互いに顔を見合わせたまま、すぐには言葉が出てこないのだ。
焦振茂は、このまま膠着してしまうのを恐れ、中断した話題をつづけるべえと、顔を韓百安のほうに戻した。
「そんなら約束しただ。天気になったら、山へ人をやって葛のつるを刈らせる。刈って来たら、おめえが責任もってこの仕事をやる。葛は一回刈っただけで、たりるべえか？」
韓百安がいった。
「たりるだよ。あんまりこわくなっちまったのは、使いものになんねえし、青すぎても使えねえ」
馬翠清が話の仲間入りをした。
「葛のつるなんか刈って、どうするんです？」
焦振茂はこたえを韓百安に譲って、かれの口からいわせようとしたが、相手にこたえる意志がないのを見て、
「麦わらでむしろを編むだよ、葛のつるを縄代りにすれば、ぜにも節約できるし手間もはぶける。こりゃ、みんな、おめえの百安おじさんが考えだしてくれたこった。このおれも、そんなうめえことは考えつかなかったでな」
馬翠清がいった。
「名案だわ。葛のつるは麻縄よりもっと丈夫よ。そのうえ合作社のおかねも節約できるわ」
焦振茂が相槌打って、

「おめえの百安おじさんはな、頭ん中にいろんな名案を貯えておるだよ！　こんども、こんないい案を、思いついてくれただけでなく、おまけにじぶんで山へ葛のつるさ、刈りにいくっていってるだ、こりゃ表彰もんじゃねえか？　あとで、おめえたちの黒板新聞（訳注　黒板に政治宣伝や、ニュースや、表彰文などを書いて知らせる方法で、農繁期には畑などでも用いる）に書きだして、百安おじさんを表彰してくれや！」

馬翠清がうけあった。

「もちろん、いいわよ。あやまちを犯せば批判する、いい事すれば表彰する、わたしたちは貸しもなければ借りもない、遠い近いの差別なんか絶対につけませんからね」

ここで、この話題は、一巻の終りとなってしまった。

焦振茂は、お得意の「調停役」の腕を発揮して、しきりに韓道満に眼くばせしてみせたが、一向に効き目がない。あせったかれは、足をのばして、力まかせに韓道満をつっついた。

韓道満は父親の顔を盗み見ながら、つばをのみこんだり、から咳をしたりしていた。さっき、歩きながらいろいろ考え、話す言葉を準備してきたのだが、こうやって父親を眼のまえにすると、どこからきりだしたらいいのか、途方にくれた。父親の無表情な、氷のように冷たい顔を見ていると、腹いっぱいつめこんできたはずの言葉も、ひとこと残らず消え失せてしまうのだった。

焦振茂は韓道満が、口火をきる勇気がないのを見て、こんどは馬翠清に眼くばせした。その眼には、おめえが先にぶっ放せ、火力はあんまり強くしちゃ駄目だぞ、やさしくやんな、という意味がこめられていた。だが、眼くばせしたあとで、焦振茂はいささか後悔した。この娘っ子は竹を割ったような性格で、思った事はすぐ口にだすし、不合理な事を眼の仇にしているばかりか、思想の遅れた人間を絶対に容赦しねえ、この娘の口からやさしい言葉を吐かせようなんて、そりゃ夢よ！　これ以上発砲させたら、やっと頭がひらけたばかりで、まだ歩きだしてねえ相棒を、またあと戻りさせちまうわい！

だが、後悔は先にたたず、馬翠清はぜんぜん焦振茂のほうに眼もくれず、そのようすでは、すぐにも発砲しそうだった。そのとき、かの女は、尻を少しオンドルの奥のほうに移すと、顔を韓道満に向けて、歯をむいて見せていた。それは、ちゃんと打合わせて来て、あんたが話

すことになってたのに、よくもいまになって啞をきめこみ、防空濠にもぐりこんじまったわね、よくもわたしひとりを、土俵におしあげちまったわね、あんたはまったく悪党よ！　といっているのだった。だが、視線を韓百安に向けたとき、とつぜん、年寄りの胡麻塩頭が、その眼にとびこんできた。どうしたわけか、娘は心を揺さぶられ、忘れていた往時の思い出が、いちどきにまぶたの裏に、浮かびあがってきた。

それは、馬翠清が、まだ七つか、八つのころだった。七、八歳の小娘が、お転婆なこととときたら、男の子でさえ及ぶ者がなく、どこにでも出かけていくし、なんでもやってのけた。それは韓百安の院子のあんずの樹に、実がみのったときのことだった。あんずの実は、日増しに濃いみどりを薄みどりにさせ、枝もたわわに鈴なりになった。通りで遊んでいたひと群れの子供が、塀越しにそれを見て欲しくなり、てんでによだれをたらしていた。そのうちのひとりがいった。

「翠清、おまえ、いつも肝っ玉がふといって、ほらばかり吹いてるじゃねえか。ほんとうにふといんなら、中に忍んでって、あのあんずを盗んで来れるかい？」

馬翠清は小首をかしげると、

「そんなこと平ちゃらよ！　さあ、いきましょうよ！」

みなは外からコーリャンの茎で、門のさし金をはずしてあけ、院子にはいりこんでいくと、中からまた門扉をあわせた。ちょうど石臼のそばに、床机が置いてあった。馬翠清は床机を運んでいって、爪先立ちに立つと、あんずの樹の枝に手がとどいた。そのままよじのぼり、いちばん上まであがって、薄みどり色の大きいのをねらってはちぎり、上着のポケットにしのばせた。小さなポケットがまだいっぱいにならないうちに、樹の下の子供たちが、蜂の巣をつっついたように騒ぎだした。韓百安が戻って来て、門口にすがたをあらわしたのだ。みなは顔色を変えて、じいさんのわきの下をくぐって、逃げていってしまった。樹の上の馬翠清も、肝をつぶした。韓百安は腹がたつやら、もったいないやら、顔をまっ青にして、地団太踏んでののしった。

「この餓鬼どもが、おれのあんずをいためおって！」かれは、樹の上の馬翠清を見つけた。「この小猿め、降りて来る度胸があるか、降りて来たら、その頭がかけるほど、ぶちのめしてくれるぞ！」

馬翠清はふるえあがった。韓百安が有名なけちん坊なのを、知っていたからだ。息子の韓道満が、あんずをひとつ盗みぐいしただけで、平手打ちをくらったほどなのだ。馬翠清はその眼で韓道満がなぐられるのを見て、韓百安のうしろすがたに向かって、

「けちん坊！」

とののしったことがある。

いま、姓の違う他人が忍び来んできて、かれのあんずを盗んでいるのを見て、許してくれるはずがない！ 他のことはとも角として、樹の下の床机を、持っていかれてしまったら、降りるに降りられなくなり、無理に降りれば、きっと、転んでけがをしてしまうだろう。考えれば考えるほど恐くなったが、仕方なく勇気を奮って、枝から幹へと這い降りていった。ところが韓百安は、床机を持ち去らないばかりか、馬翠清が小さな両足をいくらのばしても、床机にとどかないのを見ると、かけよって来てささえてくれ、おまけに、抱きとめてくれたのだった。馬翠清はわめく勇気も、叫ぶ度胸もなかった。ふと、顔をふり向けると、その眼に、脳天から汗を噴きだしている、胡麻塩頭がとびこんできた。じいさんは馬翠清を抱きおろしたあとも、顔を青くしてどなりつけた。

「おめえたち、これでも人さまの物をそこなったと思わねえのか？ あんずはまだ熟しきってねえ、ちょうどでっかくなる最中だ、おめえのこのポケット半分のあんずは、もう少しすれば、ポケットいっぺえになるのだぞ！」

馬翠清は恐ろしさにふるえた、あんずをとりだすと、地面に投げすてて逃げだした。韓百安がじぶんを摑まえて、放してくれないのを恐れたのだった。だが韓百安は、かの女の背後から、どなっただけだった。

「おめえのおっかさんに、会いにいくからな。こっぴどくどやすようにいっとくから、まってろよ！」

馬翠清はとても恐くて、家に戻れなかった。母親のほうが河っぷちまで捜しに来て、やっと見つけて連れ帰ったのだった。だが、母親はこの事で、ひとことも叱ろうとはしなかった。韓百安は、かの女の母親にいいつけなかったのだ。そのあとで、また韓百安に出会ったときも、かれは馬翠清をののしらなかった。ただ、あの屋根つきの門に、銅の錠前をとりつけ、あんずの樹の幹のまわりに、すっぱい実のなった、さねぶとなつめの枝を、ぐるりと縛りつけただけだった……

馬翠清は、そのあとよく、じぶんを抱いてくれたときの、あの年寄りの白髪頭を思いだした。かの女は二度とふたたび、かげで韓百安を、「けちん坊」とののしるような真似はしなくなった。

それから、それは馬翠清の母親が病死する、まえの年のことだった。麦刈りの季節になったが、母親は病いの床に伏して、起きられなかった。畑の麦はみのりすぎてしまって、穂が地面に落ちてきた。その土地は、韓百安のあの細長い畑と、隣りあわせになっていた。韓百安はそれを見て、馬翠清の家にやって来ると、門口に立って外から声をかけた。

「あねさん、麦を刈らなきゃ、すぎちまうぞ」

母親がこたえた。

「わたしは刈る力がないんです。子供も小さくて……」

韓百安がいった。

「臨時に人を雇っても、刈らなきゃ駄目になる。畑で枯らしちまうなんて、なんちゅうもってえねえこった！」

「すまないが、助けると思って、代りに刈りとってはくれませんかい。手間賃は、いくらでも好きなだけ、刈った麦から差引いておくんなさい」

韓百安は刈りとらなかった。後家の難儀につけこんでぴんはねしたと、蔭口きかれるのを恐れたからだった。だが、かれは蔭でなん人か臨時に人を雇って、麦を刈りいれてくれた。そのあとで、母親の病気は余計に重くなり、医者を呼んだり、薬を買ったり、借金がかさんで、その畑を売らなくては、ならなくなってしまった。売買契約書をとり交す日に、馬翠清は韓百安が、かの女の家のまえを、往ったり来たりしていて、中にはいって来ようとしては、ためらっているのを見かけた。馬翠清はかけよっていって、声をかけた。

「おじさん、中にはいってよ」

韓百安の顔はまっ青だった。かれは中にははいらなかったが、力なく門口の石段に腰をおろすと、そのまま言葉もなくうなだれていた。馬翠清は、なにがなんだかわからないまま、年寄りの胡麻塩頭を見つめていた。しばらくして、韓百安はやっと溜息をついて、いった。

「翠清、おめえはまだ小せえ、土地はおれたち百姓の生命の綱っちゅうことが、おめえにはまだわかるめえ。それを他人の手に売りわたしちまって、おめえら母子三人、この先、どうして暮らしていくつもりだ！」……

それからというもの、馬翠清は、韓百安が善良な心の持主であることを知り、かれを嫌うようなことは、二度となくなった……

これらの往事が、馬翠清の眼のまえに、つぎつぎにあらわれては、消えさっていった。とつぜん、かの女は、頭をどしんとどやしつけられるように、じぶんの韓百安にとっている態度が、どんなに一面的であったかを感じたのだった。この間、知らず知らずのうちに、かれに悪感情を抱くようになり、まわり道を見るのと、同じ眼で見ていたばかりか、馬斎のような人間とも、区別をつけていなかった。蕭書記の言葉は正しい。韓百安はまわり道たちとは違うのだ。忍耐強く説得さえすれば、かならず、こっちにかちとれるのだ。かれをこっちにかちとれば、敵側の力は、それだけ弱くなり、じぶんたちの側の力は、それだけ強くなるのだ。

この竹を割ったような気性の娘は、あらたな感動に心を揺さぶられ、あれこれと考えていたが、じぶんでも驚くほどの激しい力につきあげられて、知らないうちに、韓百安のほうに身体をすりよせると、ま心こめて口をひらいていた。

「おじさん、蕭書記が道満を批判したのよ。共青団支部の同志たちも、わたしに意見をだして、これまで、あんたに手を貸すのがたりなかった、忍耐力に欠けていたって、批判したのよ。こんどの事は、みんな、わたしたちが誤っていたのだわ……」

この言葉が、馬翠清の口からとびだしたとき、韓百安がびっくりしたばかりでなく、焦振茂でさえもが、とても意外に感じたのだった。韓道満は、すっかり喜んでしまっていた。

焦振茂は、すぐに口をさしはさんで、

「見ろよ、子供たちまでもが、おれたちに手を貸すのがたりなかったと、いっておるわい！　おれたちも、てめえの事を反省してみなくちゃなんめえな。てめえの思想は、遅れてたんじゃなかろうかって。そうでなければ、人さまの手を貸りなくちゃ、なんねえはずがねえだ！」

韓道満も口をそえて、

「おとっつあん、これからは、おれたちは二度といがみあうのを、やめにしよう。みんなで楽しく暮らすべきだ……」

馬翠清がいった。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「他の家では、みんな仲良く暮らしているというのに、どうしてあんたたち父子は、いつも牛のひずめのように、まっぷたつにわかれているの？　これは、小っちゃな事ではないのよ。わたしたちは、みんな合作社の社員なんだから、一家の不和は、みなの衆にも影響するのよ。どうしていつも喧嘩ばかりしているの、どちらが正しいのか、是非はおのずからはっきりするはずなのに、今後、わたしたちはおじさんに手を貸して、この問題をはっきりさせようと、思っているのよ！」

焦振茂がそばからいった。

「わき道にそれて歩いていたのを、みなの衆と同じ道に戻って来れば、おのずから楽しい暮らしができるというものよ」

韓道満がそれをうけて、

「腹をたてたり、いがみあったりしねえためには、おとっつあんも、進歩しなけりゃ駄目だ。今日、雨の中で麦を守ったようにね、みなの衆が、おとっつあんを讃めるのを聞いて、おれはどんなに嬉しかったか知れねえぞ！」

馬翠清も口をそえて、

「蕭書記もそれを知って、とっても喜んでいたわ」

焦振茂がいった。

「おれはもっと嬉しかったぞ。まえまえから、この日の来るのを持っていただよ」

韓道満は一歩すすんで、

「進歩してえと思うんなら、しっかりと人さまに学ぶべきだ。いい人のほうに近寄って、悪い奴らの仲間入りしねえ。あんな連中とつきあっていて、いい事があると思っているのか？　おとっつあんは、振茂おじさんを見習うべきだ、おじさんはとても進歩してるし、こんなに積極的じゃねえか！」

焦振茂は、あわてて手をふって、

「いやあ、まだまだよ。おれのことはいわんでくれ。以前は、おれもそう思っていただよ。ところが最近になって、おれはやっと鏡に照らしてみて、顔が汚ねえのを知ってな、あわてて洗いはじめただよ。あの馬老四に比べたら、十万八千里の差があるのよ」

馬翠清がいった。

「差はいくらあっても平ちゃらよ。正しい方向に向かって歩きさえすればね。わたしは考えれば考えるほど、わからなくなってしまうのよ。合作社は眼のまえにある

し、幹部もすぐそばにいる、ちゃんと見ることも、手でさわってみることもできる。おじさんのように計算にたけた人が、どうしていつも、反対の算盤ばかり、はじいているのかしらって？　とことんのところ、集団がいいのか、単干がいいのか？　蕭書記の側の衆がいいのか、馬之悦の側の連中がいいのか？　こんなにはっきりしたことは、ないじゃないの？　どうしておじさんは、眼をしっかりあいて見ようとしないの、どうしていつまでも、頭がひらけないの？」

そこまでいって、かの女はまたもや、むらむらと怒りがこみあげてくるのを感じた。じぶんが「限界」に来ているのをさとった馬翠清は、これ以上つづけると過激になるのを恐れ、唇をとがらせたまま、黙りこんでしまった。

韓道満が、そのあとをひきうけて、

「頭がひらけなくても、考えがつかなくても、蕭書記はまっていてくれるといったけどね、だがよ、おとっつあん、おとっつあんは潮流ってものを、見きわめるべきだよ！　潮流を見きわめられねえと、悪党どものわなにはまっちまうんだ！　今日は、おれもとことん、おとっつあんと話しあうつもりだ。おれは潮流にそって歩く決心をしたんだ。社会主義の道を歩くんだ。おとっつあんがおれのために用意してくれた古い道を、おれは絶対に歩くことはできねえんだ。そんな道は袋小路につきあたっちまう。おれの選んだ道は、あかるい広い道だ。おとっつあんは、おれたち青年の植えた苗圃を、見なかったかい？　麦刈りがすんだら、苗樹を山へ植えるんだよ。蕭書記がいってたけど、りんご園やぶどう園もひらくし、そのうえ、トラクターや、電気も使うようになるんだって……。おとっつあんは、単干がいいと思ってるけど、八代生れかわって単干やったって、こういう事はできねえだろうが。なんでおれは、こんなに広い道を歩かねえで、小っちゃな横っ丁に、まがらなくちゃなんねえんだい？　おれの歩く道は長いんだぜ！　おれが今日、家に戻って来たのは、おとっつあんに対して、おれがあやまった行動をとっていたのを、認めたからだ。おれがあんたに対して、手助けするのがたりなかった、闘争するのがたりなかった、そのあやまちを、認めたからなんだ。おれが家に戻って、またおとっつあんと一緒に暮らそうと思ったのは、あんたをおれについて歩かせるためだ、

あんたに降参するためじゃねえんだ！」

その力強い言葉を聞いた馬翠清は、少なからず驚いたが、思わず顔をかがやかせ、もう少しで韓道満のために、拍手喝采するところだった。

だが焦振茂は、韓道満の言葉が少しきつすぎたと思い、韓百安が立腹して、また父子喧嘩にでもなったら、いままでの努力が水の泡になると恐れた。それで、あわてて仲をとりもって、懸命に口調を柔げて、

「百安よ、人を見るには心を見る、話を聞くには、声を聞くっていうじゃねえか。おれの見たところじゃ、道満のおめえに対する心は熱く、おめえに話す言葉には、誠がこもっておる。おれはあの子に賛成だ。おれたちふたりは、古いつきあいだ、互いになにもかも知りあった仲だ。今夜は他に用事もねえし、おめえに心をさらけだして話しあい、おれのいいぶんを、聞いてもらおうと思うだよ。これまでのおれたちは、一緒になれば、小っちゃな算盤玉ばかりはじいていたが、今日はおめえと一緒に、大きな算盤玉を、はじいて見ようと思うだよ。まず、おれたちのこの天下のことから話をすすめれば、昔は悪党や外人がとりしきっておって、おれたち百姓がどんなにつれえ目に会ったか、こりゃ、くわしくいうまでもねえこった。いまでは、みなの衆でとりしきって、太平な暮らしを送れるようになった。これからは？　これからも、社会主義の暮らしを送るのよ――おめえもいつまでも、この暮らしはつかみどころがねえ、しっかりしてねえ、などと思いこんでいるでねえ、そのじつ、もう眼のまえに見えてるでねえか！　社会主義がなかったら、今日のような収穫は、とても望めなかったじゃねえか？社会主義がなかったら、今日のこの雨で、麦はみんな濡れちまったじゃねえか？　こりゃみんな、おめえがその眼で見たこった。話をつづけると、この天下を治めるまでには、共産党の衆は、どれだけの苦難を経てきたことか！　話によると、あのころ、共産党は、日本の鬼兵をやっつけるために、南から北まで、なん万里も歩きまわったっちゅうこった。そうそう、二万五千里よ、ズボンのバンドを食ったり、草の根っこをかじったりしてな。おれたちの北のほうにある、あの密雲石匣のトーチカを攻撃したときなんざあ、もの凄え戦いだったじゃねえか！　なかなか攻め落とせねえとなると、羊毛のじゅうたんに水をぶっかけ、身体に捲いて、トーチカのまえま

でころがっていったものよ。共産党は初っぱなから、いいことばかりやっているっちゅうのに、それでも反対する者がいた！　蔣介石が反対するし、地主や漢奸も反対する、おれたち中農の中にも反対する者がいた！　このおれもそのひとりだった。日本の鬼兵と戦っていたころ、軍靴の供出がよそより一足分多かったので、面白くなかったこともあるし、食糧の供出のときも、いつもものの悪いのをだすようにしてきた。土地改革のとき、頭数でわって、一ムーおれんちにわけてくれたのを、不義の財なんか欲しくねえ、人さまの土地をただどりするなんて、そんな良心にもとることはできねえって、無理に返上しちまった。そのあと、共産党は農業合作社をはじめたが、いまさらいうにゃあ及ばねえ。おれたちは一緒になってぼやき通し、おまけに悪口までいったもんだ！　道満や翠清が笑っても、おれは恐くねえ。今日、おれたちは、心の中にあることを、とことんさらけだしちまおうじゃねえか！　人間は、生きれば生きるほど利巧になるべきで、長生きするほど馬鹿になるべきじゃあ、あんめえが。新らしい事物っちゅう奴が、このおれにも少しずつ、少しずつわかってきたのよ。日本の鬼を追っぱらったら、おれたちは、二度と逃げださなくてもよくなったし、土地改革をやったら、おれたちはこれ以上、地主の奴にいためつけられなくてもよくなった。婚姻法が実施されると、身投げする女がなくなったし、合作社ができると、貧乏人は暮らしがよくなったし、おれたちのようなそう貧しくも、そう金持でもねえ者も、安心な毎日を送れるようになった！　おめえもその眼玉を、まえのほうに向けるべきだ、この先は、もっともっとよくなるわい！　おれたちも、もう以前のように、いつまでも持病を治さねえで、なにか新らしい事が起るたびごとに、最初はなにがなんでも、反対するっちゅうような、あんな真似は、二度とやらかしちゃなんねえだ……」

年寄りは、たてつづけに話をしていた。目的は老友を説得することにあったが、実際には、かれがその長い生涯をかけて経験した、苦難と光明に満ちた人生の歴史を、総括しているのだった。これは、かれのま心こめたうちあけ話であり、すでに光を放っているじぶんの心をとりだして、昔なじみの相棒に見せてやりたい、そして心と心を比べあって、このくだらない寄り道をしている愚かな相棒を、じぶん同様に正道に戻らせ、潮流にのせ

て、馬老四たち老貧農に追いつかせたいという、願望のあらわれでもあったのだ。

焦振茂は話をつづけた。

「おれも以前はわからなかったのよ。ちょうど、いまのおめえが、このおれをわからねえみてえにな。どうしておれは、あれら若い者たちのように、あの馬老四や喜じいさんのように、新らしいこと柄を、すぐさま支持できねえのか、どうしていつでも、最初は反対、あとになってやっと賛成するのか、おれ自身にもよくわからなかった。いってえこりゃ、どんな病気にかかってるんだってな！　ところが、最近になって、やっとつきとめることができただよ。とことんつきつめていけば、おれは私利私慾に眼がくらんでおったのよ。小っちゃな算盤玉ばかりはじいて、大きな算盤玉をはじかねえ。貧乏人の気骨、貧乏人の心意気っちゅうのが欠けていたのよ」そういうと、わざとしばらくまを置いてから、語気を強めて、韓百安の顔を見つめた。「百安、いまのおめえの病気もこれよ。私利私慾、私利私慾、おめえはあまりにも利己主義なのよ！」

韓百安は顔をあげて、焦振茂の顔をちらりと見たが、また眼を伏せてしまった。

焦振茂は気がつかずに、また相棒のほうに身体をすりよせた。

「百安、おれとおめえは一緒に生きてきた、それなのに、おめえはどうして、おれと同じぐれえ進歩しねえんだ？　おれの見たところでは、道満も、翠清も、みんなおめえの病源をつきとめたようだ、おめえも、これ以上隠しだてしねえほうがええ、殻をぴったりとじて、注射もさせねえ、灸もすえさせねえのは、よくねえこった。ひとことでいえば、これはおめえが貧農に学ばねえで、悪党どもとばかり、つきあっているからだ……」

韓百安は、唇をわなわなふるわせていたが、やっとのことで口をひらいた。

「なにい、おめえもこのおれが、悪党とつきあうというのか？　そんじゃあ聞くが、だれが悪党だ、おれが悪党とぐるになって、どんな悪事を働いたっちゅうだ？　おめえら寄ってたかって、このおれに濡衣きせる気か！」

焦振茂がいった。

「そうあせるでねえ、おれのいうことをとっくり聞いてくれ、おめえが仲良くしているあの連中、あいつらはみ

んな善人かね？　まわり道、馬大砲、みんな合作社ちゅう車がひっくり返えって、車軸が折れちまったほうがいいと、思っているだ。あいつらは、食糧の闇売りをやらかし、政策や布告に違反した。食糧騒ぎや、土地に配当だせっちゅう騒ぎ、ありゃみんな悪いこった、みんなよい人間に反対し、社会主義に反対しているこっちゃねえか！」

韓百安は、ぼそぼそといった。

「おれも根っこからは、あいつらを信用なぞしていねえわ。あいつらに対しては、おれもそれなりの、備えをしておるわい！」

韓道満が口をさしはさんだ。

「じゃあ、おとっつあんは、だれを信用してるんだい？馬之悦は信用できるって、いうのかい？」

「ありゃ幹部だんべえが、ありゃ頭目じゃねえか！」

馬翠清がこらえきれずに、

「なにが幹部、なにが頭目よ？　あいつは大悪党よ！」

韓百安は仰天して、おちこんだ両の眼を、宙にすえてしまった。

「なにい？　馬副主任がなんだとお？」

焦振茂も語気を強めた。

「おめえはまだ、だまされていたのか？　ほんとうの事をうちあけるとな、あいつはいの一番の大悪党なのよ！」

その言葉を聞いた韓百安は、顔色をなくしてうろたえた。みなの顔をきょろきょろ見まわしていたが、どもりどもりいった。

「兄貴、兄貴、おれたちゃ、良心にもとる言葉を、口にするべきじゃねえぞ！」

焦振茂がいった。

「以前には、このおれも、やたらと良心をふりまわしたものよ。あいつの事を、ほんとうに知ったら、おめえはおったまげて、とびあがっちまうぞ！」

馬翠清も言葉をそえた。

「あいつは根本的に、いい人間なんかじゃないのよ。人間の皮をかぶった狼なのよ！」

というわけで、焦振茂と馬翠清は、馬之悦がどんなに権謀術数をほしいままにして、合作社の屋台骨を、たたき潰そうとしているのか、どんな手段を使って、蕭長春と焦淑紅をおとしいれようと企んだか、どうやって孫桂英に乱暴を働こうとしたか、またどんなにして、奸商と



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.